

主題別科目（思索と言語）

言葉を科学する

人間の再発見

奥 聡

TA: 田中優作

本資料及び資料に含まれる第三者著作物を再使用する場合、
利用者は、それぞれの著作権者より使用許諾を得なくてはなりません。

Day 01: Introduction

Organization of Today's Class

1. 科学的にやるとは？
2. 新しい言語科学の誕生
3. 対象を客体化する: ちょっと練習
4. 今日のまとめ

(1) 最近の若者のことばは乱れている(?)

(2) a. 急いだけど間にあわなかった。試合の最後も見れなかった。

(Cf. 見られなかった)

b. お腹の調子が悪くて、あんまり食べれないな。

(Cf. 食べられない)

(3) 「ら」抜きことば: どう思いますか

- a. できるだけ「ら」抜けにならないように気をつけるべき
- b. 「ら」抜けでもかまわない。気にする必要はない
- c. どちらともいえない

(4) 「～すべき」「～べきではない」
規範的態度 (prescriptive)

(5) 記述的態度 (descriptive)
事実はどうなっているか。

(できるだけ) 価値判断抜きに事実を観
察・記述する

(6) 「ら」抜きことばの原因

不注意、だらしない？

(7) 「ら」がいつでも抜けるわけではない

- a. * 盗み食いをしていることを、妹に見れた。(Cf. 妹に見られた)
- b. * 残しておいたピザが、全部、弟に食べれた。(Cf. 弟に食べられた)

(8) (2)の「られ」は「ら抜き」が起こりやすいが、(7)の「られ」は「ら抜き」が起こらない(「ら」を抜くと文がものすごく不自然になる)。両者の違いは？

(2) b. ...あんまり食べれない。

(7) b. ...*弟に食べれた。

(9)

- a. (2)の「られ」は「可能」の意味を担う
- b. (7)の「られ」は「受身」の意味を担う

(10) 記述的一般化 (descriptive generalization)

- a. 可能の「られ」は「ら抜き」が起こりやすい
- b. 受身の「られ」は「ら抜き」が起こらない (起こりづらい?)

「こうあるべき」という前に

(11) 事実を確認し、一般化を導く

a. 観察

b. 実験

(12) ここまでで、ある種の「実験」が行われた。どの部分か？

(13)「実験」

理論や仮説が正しいかどうかを人為的に一定の条件を設定してためし、確かめてみること
（「広辞苑」）

(14) 仮説:

「られ」はその種類(意味機能の違い)によって、くだけた話し方でも、「ら抜け」が起こるものと起こらないものがある

(7) *ピザが、全部、弟に食べれた

(15) 人為的に一定の条件を設定:

いくら実際に使われている言語事実をたくさん丁寧に「観察」しても、(7)のような「ら抜け」文は出てこない。(たまたま、そのような例が見つからないのか、ある種の「ら抜け」はできないのか、事実観察だけでは確認できない)

(7) *ピザが、全部、弟に食べれた

=>(7)のような実際には存在しない文を**人為的**につくって、日本語母語話者にとってそれが可能な文か、不自然な文かを確かめる(日本語母語話者の無意識の言語知識を利用)=>実験

(16)

「規範的な態度」(「ら抜きはだめ!」)でいると

(7)のような実験も思いつかず

(10)のような記述的な一般化を見過ごして
しまう

(10)

possibleの「られ」は「ら抜き」が起こりやすい

受身の「られ」は「ら抜き」が起こらない

(17)言葉に対する「規範的態度」は「科学的言語研究」にとって大敵

(18) 次の問題: 記述的一般化が得られたら、なぜ
そのようになっているかの「説明」を目指す

a. 可能の「られ」は「ら抜き」が起こりやすい

b. 受身の「られ」は「ら抜き」が起こらない

(19) 考え方1

a. 「見られる」「食べられる」

[可能]

[受身]

b. 「見れる」「食べれる」

[可能]

「見られる」「食べられる」

[受身]

機能分化(役割分担)

「られ」は[受身]専用

「ら抜き」は[可能]専用

(19) 考え方1

a. 「見られる」「食べられる」	[可能]
	[受身]
b. 「見れる」「食べれる」	[可能]
「見られる」「食べられる」	[受身]

(20) 考え方2

日本語の動詞には、そもそも「可能」形と「受身」形が異なるものがある

- a. この本なら、僕でも簡単に**読める** （可能）
- b. この本は、たくさんの大学生に**読まれている**（受身）

(21) 「ら抜き」現象の二つの機能

- a. 「られ」の意味機能の負担を軽減する
- b. 日本語の動詞形全体の体系を整える

(22)ここまでのまとめ

- a. ことばを科学的に研究する
- b. 規範的態度は科学的研究の大敵
- c. 仮説検証法(hypothesis testing)
- d. ここでの「ことば」とは、一人ひとりの頭の中にある仕組み・言語能力

(23)いつから？

Organization of Today's Class

1. 科学的にやるとは？

2. 新しい言語科学の誕生

3. 対象を客体化する: ちょっと練習

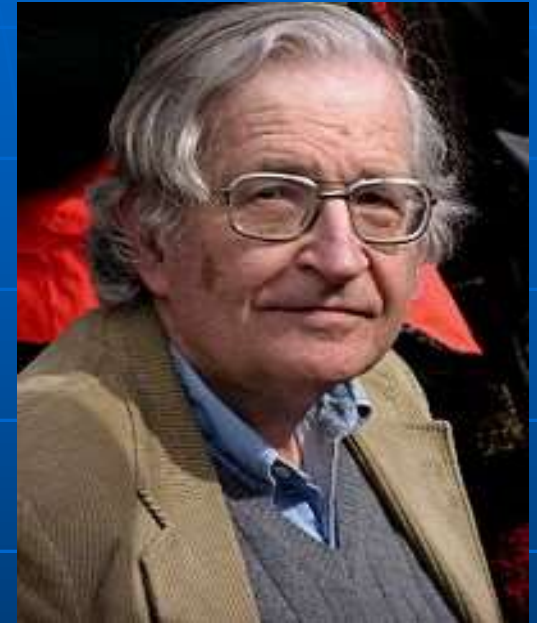
4. 今日のまとめ

(24) 認知革命 (Cognitive Revolution): 1950's

生成文法

(generative grammar)

Noam Chomsky



<http://ja.wikipedia.org/wiki/ファイル:Chomsky.jpg> (CC BY 2.0)

言語に対する新しい「研究態度」「研究方法」の誕生

(25) Generative grammar arose in the context of what is often called “the cognitive revolution” of the 1950s, and was an important factor in its development. ...**there was an important change of perspective: from the study of behavior and its products (such as texts), to the inner mechanisms that enter into human thought and action.** The cognitive perspective regards behavior and its products not as the object of inquiry, but as data that may provide evidence about the inner mechanisms of mind and the ways these mechanisms operate in executing actions and interpreting experience.

(25) Generative grammar arose in the context of what is often called “the cognitive revolution” of the 1950s, and was an important factor in its development. ... **言語行動や表に出てくる現象の研究から、人間の思考や言語行動を支える人間の頭の中にある仕組みの研究へ：視点が大きく変化した。** The cognitive perspective regards behavior and its products not as the object of inquiry, but as data that may provide evidence about the inner mechanisms of mind and the ways these mechanisms operate in executing actions and interpreting experience.

研究対象:E-言語からI-言語へ

(26)

- a. E-言語 (表に出てくる言語現象)
- b. I-言語 (「E言語」を支えている人間の脳内の言語システム)

(27) 言語研究の対象は「I言語」

「E言語」はそのためのデータ・資料

(28) 文化や社会学の一部ではなく、**生物学の一部としての言語研究 (biolinguistics)**

(29) 三つの基本的問い

a. 言語知識とはどのようなものか？

(日本語ができるというのは何を知っていること?)

b. 言語知識(自分の母語)はどのように獲得されるのか？

c. 言語知識はどのように使用されるのか？

(Chomsky 1986: 3)

Organization of Today's Class

1. 科学的にやるとは？

2. 新しい言語科学の誕生

3. 対象を客体化する:

ちよつと練習

4. 今日のまとめ

(30) 自分の言語知識・言語能力を
客観的に見る訓練

(31)「方言」と「共通語」(東京方言)

(水原明人 1994.『江戸語・東京語・標準語』(講
談社現代新書))

(32)北海道方言の発見

(33)small exercise

次の二つの「書けない」は、よく見ると意味機能が少し異なります。どのように違う？

東京方言(共通語)では

- a. あれ、インクが切れたのかな。
このボールペン、**書けない**よ。

状況可能(自発)

- b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の
名前が**書けない**よ。

能力可能

北海道方言では

- a. あれ、インクが切れたのかな。
このボールペン、_____ よ。

状況可能(自発)

- b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の
名前が _____ よ。

能力可能

北海道方言では

- a. あれ、インクが切れたのかな。
このボールペン、**書か**さらない よ。

状況可能(自発)

- b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の
名前が _____ よ。

能力可能

北海道方言では

- a. あれ、インクが切れたのかな。
このボールペン、**書か**さらない よ。

状況可能(自発)

- b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の
名前が **書け**ない よ。

能力可能

北海道方言では

- a. あれ、インクが切れたのかな。
このボールペン、**書か**さらない よ。

状況可能(自発)

- b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の
名前が ***書か**さらない よ。

能力可能

(36) 東京方言では「状況可能」と「能力可能」が同じ形式(形では区別できない)。
北海道方言では「状況可能」と「能力可能」を別の形で区別できる。

(Cf. 関西弁「よう食べん」vs.「食べられへん」)

(山下好孝 2004.『関西弁講義』(講談社)
pp.104-108)

(37) 規範的な態度でいると、方言が持つ体系
(system)を見落とすことになるかも

(39) 言語に優劣はない

どの言語もどの方言も、それぞれ独自の豊かな体系を持っている

(40) どの言語にも働いている共通の原理や規則もある

言語間の体系的な違いは、どう説明する(子どもはどのようにして違いを獲得?)

4. 今日のまとめ

(41)

a. Introduction: 言語を科学的に研究するとは

b. 新しい言語科学の誕生

c. 対象を客体化する: ちょっと練習

=> HW01